星は天に在つだけに非ず

星は天に在るだけに非ず

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18059041

ダイの大冒険, ヒュンマ, 子ヒュン, アバン, ヒュンケル, マァム

ヒュンマスターフェス合わせにしようとして間に合わなかったもの。
って、イベント終了後三週間も経っております・・・。

せっかくのスターフェスなのに、星にまつわる話がない！と思って急遽ネタを組んだんですが、そもそも手が追い付きませんでした・・・。
これも星の話なのか、と言われれば微妙なのですが。

前半が子ヒュン時代で、後半が戦後ネイル村。それなので、このシリーズに。
表紙画像はAC phot様。https://www.photo-ac.com/
絶妙の画像を見つけたので、喜んで差し替えました❤

いろいろとありますが、相変わらずヒュンマを書いています。
2022.7.31　表紙差し替え

Table of Contents

星は天に在るだけに非ず

　ヒュンケルは、夜半に目を覚ますと、導かれるように窓辺に歩み寄った。
　窓の外には漆黒の闇が広がっており、真っ暗な空が頭上に広がっていた。
　星も月も、見えなかった。
　ヒュンケルは、重い雲に覆われた漆黒の夜空をその瞳に映していた。いつの間にか、視界がゆがみ、少年は、自分が涙を浮かべていることに気付いた。
　ヒュンケルは、乱暴に、右腕で目元をぬぐった。だが、後から後から涙がわいてくる。
　少年の脳裏には、いつか父とともに見た、満天の星空が蘇っていた。
　彼の育った地底の城にも、空が見えるところはいくつもあった。
　骨の父は、少年をときどきそこに連れ出し、昼は、蒼天やそこに浮かぶ純白の雲を、夜は、真円の月や、満天の星空を彼に見せてくれていた。
　特に、星空が好きだった。
　眠い目をこすりながら見上げる夜空には、彼に語り掛けるような星々が一面に瞬いていた。
　その度に、ヒュンケルは両手を天に向けて喜んだ。
—父さん！すごい！！
　たくさんの星だね！
　そう言ってはしゃぐ彼を、父は目を細めて眺めていた。
　父は、彼を膝に乗せると、空に浮かぶ星を線でつなぎ、そこに浮かぶ物語を聞かせてくれた。
　少年の彼には、まだ難しい話も多く、ヒュンケルは、たいていは途中で、父の膝の上で眠ってしまっていた。
　気が付くと、いつの間にかベッドで朝を迎えていた。
　だが、それもすべて過去のものだった。
　彼を育んでくれた地底の城も骨の父も、遊んでくれたモンスター

も、何もなかった。

　いまはもう、星も見えない。

　夏の夜は、風が素肌を心地よく撫でてゆく。
　大人の膝くらいまで生い茂った雑草には、夜露が降り、それが深い草の匂いを運んでいた。
　普段なら涼やかに感じる夏の夜風であったが、このときのヒュンケルには、不快感しかなかった。
　何故なら、アバンがしっかりと彼の右手を掴んでいたからだ。
　ヒュンケルは、アバンに手を引かれながら、夜道を歩いていた。
　振り払おうとしたのだが、この時ばかりはアバンが頑として、その手を離さなかった。普段、ヒュンケルの意思を尊重するアバンとしては珍しいことだった。
　ヒュンケルは、抗議の色を添えて、アバンに尋ねた。
「先生っ！離してください！！」
「駄目です。今日は月あかりもなくて暗いですし、この近くには川があるんです。貴方みたいに小さな子が、夜に川に落ちたら命はありませんよ。」
　正論だけに反論もしようがなかった。
　昼から曇天に覆われていたこの夜は、月あかりもなく、アバンが右手に持つランタンが、唯一の光源だった。
　この状況で、ヒュンケルがアバンとはぐれたら、遭難すること必至であった。
　それに、まだ６歳のヒュンケルには、１６歳のアバンの手を力づくで振り払うこともできない。
　ヒュンケルは、口を尖らせながら、今度は別のことをアバンに尋ねた。
「いったいどこに行こうって言うんです。」
「さっきも言ったじゃないですか。面白いものを見せますって。」
　アバンは、軽くヒュンケルに振り返ると、片目をつぶって見せた。その笑顔が憎らしいくらい楽し気だった。
　ヒュンケルは不満をはっきりと声に乗せた。

「面白いものって何ですか！」
　だが、アバンはものともしない。
「それは、見てのお楽しみです。」
　アバンはにこやかにそう言うと、ヒュンケルの手を引いて足を進めた。
　ヒュンケルは諦めて、アバンに導かれるまま、その後をついていった。

　やがて、ふたりの視界が開けた。
　雑草を踏み分けて森の中を歩いていくと、木々の切れ間に出た。
　アバンの言っていた通り、目の前には小さな川があり、川べりは、雑木林が途切れていた。そのため、そこだけ視界が開けていたのだ。
　小川の手前は、雑草も途切れていて、小石が散らばる大地がむき出しになっていた。
　アバンは、そこで足を止めると、傍らのヒュンケルに視線を向けた。
「さ、着きましたよ。」
　ヒュンケルは、きょろきょろとあたりを見回した。
　だが、目の前には暗い小川があるだけで、何もない。
　ヒュンケルは、不満げにアバンを見上げた。
「何もないじゃないですか。面白いものって何ですか？」
　すると、アバンは、涼しげな顔で、右手に持ったランタンを掲げた。
「ああ、これがあると邪魔ですね。怖がらせちゃいますものね。」
「えっ？」
　意味が解らずに戸惑うヒュンケルを気にもせず、アバンはランタンの火を吹き消した。
　たちどころに、あたりは漆黒の闇に包まれた。
　暗闇に慣れない目には、何の輪郭も掴めないほどの、深淵たる闇に思えた。
　ヒュンケルは、突如、ひとりで闇の中に放り出されたような錯覚を覚えた。

それは、まるで死の世界であった。
　ヒュンケルの右手をつかむアバンの手の温かさだけが、いま彼が踏みしめている大地がこの世のものであるのだと告げていた。
　ヒュンケルは、上ずった声でアバンを呼んだ。
「せ、先生・・・？」
「しっ、ヒュンケル。驚かせちゃいますよ。」
　そして、アバンは、ヒュンケルの手を握ったまま、その手を下に引いた。
「危ないですから。そっと座りましょうね。」
　ヒュンケルは、黙ってアバンとともに腰を下ろした。
　アバンは、ヒュンケルの耳元で、小さな声で囁いた。
「よーく、前を見ていてください。」
　ヒュンケルは、訳も分からず、闇を見つめた。
　次第に目が慣れてきて、輪郭線が識別できるようになってきた。
　目の前にあるのは小川だ。
　その小川の向こうに、少し開けて、また雑木林が続いている。
　小川の川沿いには、小石の散らばる川べりが続いており、対岸には、川に向かって背丈のある雑草が生えていた。
　その草が、川に向かって手を伸ばすように、大きく傾いで育っていた。
　墨の濃淡で描かれたような夜の風景が広がっていた。
「あ。」
　ヒュンケルは声を上げた。
　漆黒の暗い風景の中、ぽつんと、小さな明かりが灯ったのだ。
　隣のアバンがヒュンケルの手を握ったまま、指でヒュンケルの手の甲をトントンと叩いた。見ると、アバンが唇に指を当てていた。
　ヒュンケルは、慌てて左手で口元を押さえた。
　ヒュンケルが黙ったまま、目の前の光景を見つめていると、ぽつんと、また明かりが灯った。
　その小さな明かりは、付いては消え、そしてまた増えていった。
　ぼんやりとした、だがどこか温かい淡い光は、ヒュンケルの目の前で、次々に点されていった。
　それはまるで、夜を迎えた村の家々が灯りをともすかのようで

あった。
　指先ほどの小さな光はヒュンケルの目の前で次々に広がってい
き、無数の星になった。
　地面を見ているはずなのに、星空を見上げているような錯覚に襲
われた。
　アバンが、ヒュンケルの耳元に口を当てて囁いた。
「綺麗でしょう？
　星空みたいですよね。」
　ヒュンケルが胸に抱いた感慨と同じことをアバンが形にした。
　ヒュンケルは、目の前の無数の光に圧倒され、上ずった声でアバ
ンに尋ねた。
「先生、これは・・・？」
「蛍です。」
「蛍？」
「虫ですよ。発光するんです。
　これはみんな、蛍のお尻の光です。
　呼吸しているみたいでしょう？」
　そう言えば、淡い光は、ときどき点滅している。
「蛍は、こうやって仲間と呼び合っているんですよ。
　恋をしている、と聞きましたね。」
　いきなり夢みたいな言葉が、アバンの口から飛び出した。
「・・・恋？」
「光で異性を呼んで、子孫を残そうとしているんですよ。
　恋でしょう？」
　ヒュンケルは、その例えがピンと来ずに、また目の前の光景に視
線を戻した。
　月明かりのない闇夜が幸いした。
　蛍の点す小さな明かりだけが目に優しく宿る。
　その無数の灯りが息づく中、ヒュンケルは、かつて父と見た満天
の星空を思い浮かべた。
「ヒュンケル。」
　アバンが、優しく彼を呼んだ。
「まるで星のようですね。」

先ほどと同じ感想を口にした。
　そして、少年と同じ幻想的な小さな光を視界に映し、アバンは、まだ幼い一番弟子に囁いた。
「この光は、小さな虫たちの生み出したものです。
　でも、とても美しい・・・。
　まるで、満天の星空のように。
　星は、天に在るだけではないのですよね・・・。」
　アバンは、呟くようにそう言った。

　その言葉の意味を少年が理解したのは、もっとずっと後になってのことだった。

　ネイル村の周辺には、厚い森が広がっている。
　その木々の隙間を、ヒュンケルは、マァムに手を引かれながら歩いていた。ヒュンケルは、手に持ったランタンで、マァムの足元を照らし、彼女が転ばないように気を配っていた。
「マァム、急がない方がいい。足を取られるぞ。」
「あ、そうね。
　ごめんなさい。嬉しくなっちゃって。」
　そう言って微笑むマァムは可愛らしかった。
　ヒュンケルも顔をほころばせた。
「もうすぐなんだろう？」
「ええ。この先の小川。」
　その言葉が、ヒュンケルン記憶の琴線に触れた。
　そう言えば、ずいぶん前にこんなことがあったな、と思い出し、ヒュンケルは苦笑した。
　アバンと旅をしていたころ、同じように、夜の森を、アバンに手を引かれて歩いたことがあった。
　あのときと同じように、今度はマァムに手を引かれ、彼は、夜の森を歩いている。
　気が付くと、あのときのように視界が開けた。ヒュンケルがランタンを掲げて、先を見る。
　すると、そこには、確かに暗い夜の小川が広がっていた。

「ここでいいわ。ヒュンケル、明かりを消して。座りましょう。」
「ああ。」
　彼は、マァムに言われたとおり、ランタンの明かりを消し、その場に腰を下ろした。
　彼と手をつないだまま、マァムも座り込む。
　心地よい沈黙が流れていた。
　互いに繋いだ掌が温かい。
　言葉はなくとも、確かにそこにいるのだとの信頼感と安心感が、そこから伝わってきていた。
　やがて、ふたりの目の前に、小さな明かりが灯った。
　いつか見た風景と同じように、その灯は、次々に灯っていき、瞬く間に無数の灯りが広がっていった。
「キレイでしょう？」
　マァムが誇らしげにそう言って微笑んだ。
「ああ。」
　ヒュンケルもうなずいた。
「蛍、だな。」
「うん。」
　ヒュンケルの問いとも言えないような問いに、マァムはうなずいた。
「去年は、ヒュンケルが村に来たばっかりだったから見せられなくて。気が付いたら季節が終わっちゃってたから、今年はどうしても見せたかったの。
　きれいでしょう？
　私の好きな、夏のネイル村の景色のひとつよ。」
　そう言って目を細めるマァムの横顔は、暗闇の中でも美しかった。
　ヒュンケルは、マァムの肩に手を伸ばし、その身を抱き寄せた。
　礼を述べたかった。
「ありがとう、マァム。」
　すると、マァムは首を横に振った。
「ううん。だって、私がヒュンケルと見たかったんだもの。
　わがまま聞いてくれて、私こそ、ありがとう。」

マァムは、彼の胸に頭をつけて、その身を預けていた。
　そのまま二人で語り合う。
「夜の森に行きたいと言われたときには驚いたぞ。
　転んだらどうするんだと心配だった。」
「貴方が手をつないでくれたから心配なかったわ。」
「俺は気が気じゃなかった。
　お前ひとりの体じゃないんだからな。」
「心配しすぎよ、ヒュンケル。
　・・・でも、ありがとう。」
　そう言って、マァムは、そっと、自分の下腹部に手を当てた。
　自分の右半身にマァムの肩を抱き寄せたまま、ヒュンケルも、マァムの手に自身の手を重ね合わせた。
　とくん、とそこから命の息吹が伝わってくるようであった。
　ふと、風が吹いた。
　その風にあおられ、無数の光は身をひそめ、飛び立ち、その先でまた灯をともす。
　光の乱舞の中に、ふたりはいた。
　マァムがふっと笑みを浮かべ、呟いた。
「ふふ。星空の中にいるみたい。」
　マァムのそのひとことが、ヒュンケルの記憶に残るアバンの言葉を呼び覚ました。
—星は、天に在るだけではない。
　ヒュンケルは、マァムの肩を抱き寄せる右腕に力を込めた。
「ヒュンケル？」
　マァムは不思議そうに彼を見上げた。
「・・・いや、なんでもない。」
　そう言ってマァムを見つめる彼の目は、どこか、泣き出しそうにも見えた。
　マァムは、そっとヒュンケルの頬に手を伸ばした。自分の下腹部から手を離し、両手で彼の頬を包み込む。
　そして、そのまま、穏やかに微笑んだ。
「ヒュンケル。
　私は今ね、すごく・・・嬉しいわ。幸せなの。」

「・・・俺もだ。」
　マァムは、何も尋ねなかった。ヒュンケルが感じている何か思いがあるのだろうと気付いているにもかかわらず、彼に無理に語らせようとはしなかった。
　ただ、彼女の感じている幸福だけを伝えてくれていた。
　だからだろうか。
　胸にかけた枷が外れる、声なき音が身の内に響いた。
　ヒュンケルは、自然に言葉を紡いでいた。
　彼のよく通る低い声が響く。
「マァム、俺は、父を亡くしてから、暗い空ばかりを見上げてきた気がする。
　父と見上げた星空はもうどこにもないのだと、そう思っていた。
　だが、そうじゃなかった。
　星は、空に在るばかりではなかった。
　いまここに、俺の腕の中に、お前の中に、ある。」
　そう言って、もう一度、彼はマァムを抱きしめた。
　その胸に彼が抱くのは、ふたり分のいのちとしあわせだった。

　星は、天にあるばかりではない。
　手の届く目の前に、いまそこにある。